加来さんの考えるヒント 08

ビジネスには基本が大切

時代の転換期に、何を学ぶべきか――人はこれまでも、変革の時代、未来への不安から、何か心の支えになるものを、生き抜いていける新しい”心の支え“を、と探し求めてきた。

戦国時代が徳川家康の天下統一で終焉をむかえ、もはや槍一筋で大名になれる、との虹のような夢が消えた武士の世界では、大量にあぶれた牢人（かつて主取りをしたことがあり、諸般の事情から浪々の身となった者）を中心に、人々は泰平の世を生き抜ける、”心の支え“を探し、群がった。

たとえば、「軍学」である。

当初、戦国末期の時世で、最も流行したのは「剣術」を中心とした武術であった。だが、合戦の主力が鉄砲に移行してしまうと、いかに個人の技量が高くとも、実戦の役には立たなくなってしまう。

それでは、と人々は「剣術」と並行しての「軍学」修行へ飛びついた。これは泰平の世にあって、起こるべくして起こった学問といえたかもしれない。

合戦がなくなっても、世の中は武士の軍事体制を組織化した、”幕藩体制“を敷いていた。にもかかわらず、合戦がなくなってしまうと、戦陣の組み方や夜戦の注意事項など、本来、実戦の中で学び、身につけるものがわからなくなってしまう。

そこで、築城術のような理工系の知識も加えた、戦の駆け引き、合戦の仕様を机上に学ぶ、「軍学」がブームとなった。

まず、名将・武田信玄の軍作法を集めた『甲陽軍鑑』が完成し、これをテキストに「甲州流」軍学が誕生した。

信玄があるなら、ライバルの上杉謙信も負けてはいない。こちらは「越後流」と称せられ、このほかにも百花繚乱の様相となる。

ところが、幕閣にしろ、諸大名にしても、見識のある者は皆、軍学を疑問視しており、一種のアクセサリーのように、藩内に少数は抱えてみたものの、この学問を広めようなどとは考えなかった。

なぜならば、合戦において一番求められるのは「独創性」であり、平時においては「創造力」であって、決して記憶する力ではなかったからだ。

「軍学」は決して机上において、実戦で使える新しい戦法を、生み出すことはない。

しかし、「そんなことはない」と、世上の思わぬ反応に、反発した者が出た。

由比正雪（一六〇五～五一）とその一党である。

慶安四年（一六五一）に三代将軍・徳川家光が他界すると、幕政を批判して牢人・浪人を集め、一挙に倒幕を企てたが、未然にことが露見し、正雪は駿府の宿で自殺して果てた。

世にこれを、”慶安事件“と呼んだが、つまりは、軍学は役に立たなかったことを、正雪は自ら証明してしまったことになる。

以後、軍学ブームは衰退した。

昨今の「情報技術」「語学」もまた、ビジネスマンにとっては目的ではなく、一つの手段でしかない。

手段は常に変遷する。ならば、日本人にとって息長く、すたれることなく受け継がれてきた、「読み」「書き」「そろばん」にこそ、目をむけるべきではあるまいか。

基本のないところに、もとより、「独創性」も「創造性」も、はぐくまれることはないのだから。

（了）

PROFILE
加来　耕三氏

奈良大学文学部研究員を経て、現在は大学・企業の講師を務めながら、歴史家・作家として、独自の史観に基づく著作活動を行っている。その他、専門知識を駆使し、時代考証はもちろん、テレビ・ラジオ番組で監修・構成・出演など、幅広く活躍している。